《資料１》

第一次大極殿院復原原案研究の進捗状況について

2010.12.9

箱崎和久（奈良文化財研究所）

１.第一次大極殿院復原検討会について

これまでの検討会の概要

	議　題　（発表者・所属）	出席者
第１回　7 月 23 日	「全体計画と今後の検討事項」（箱崎和久・奈文研） 「文献史料からみた大極殿院内の諸施設」（渡辺晃宏・奈文研） 「検出遺構の確認」（大林潤・奈文研）	30 名
第２回　8 月 24 日	「平城宮の諸門と南都寺院の門－重閣門をめぐる補考」（渡辺晃宏・奈文研）	17 名
第３回　9 月 10 日	「平安時代の大極殿儀－回廊の機能を中心として」（山本崇・奈文研） 「第一次大極殿院の瓦①」（中川あや・奈文研）	17 名
第４回　10 月 6 日	「中国における大極殿院相当施設の様相」（吉田歓・山形県立米沢女子短期大学）	26 名
第５回　10 月 15 日	「発掘資料に見る大極殿院相当施設と南門・楼・回廊 ―高句麗・新羅・渤海・高麗―」（千田剛道・奈文研）	21 名
第６回　10 月 25 日	「六国史にみえる９世紀以降の平安宮などの楼の史料、および 大射・騎射の施設について」（渡辺晃宏・奈文研） 「中央区朝堂院の仮設建物と柵列―騎射の場」（鈴木智大・奈文研）	19 名
第７回　11 月 5 日	「第一次大極殿院回廊の標準断面の検討」（鈴木智大・奈文研）	17 名
第８回　11 月 25 日	「第一次大極殿院東西楼の復原案の推移」（海野聡・奈文研） 「第一次大極殿院回廊内部･地形復原にかかわる検討課題」（大林潤・奈文研）	19 名
第９回　12 月 1 日	「渤海の都城における第一次大極殿院相当施設の検討」 「南門のこれまでの復原プロセスの検証」	22 名

検討会成果の概要

① 文献の検討から、『続日本紀』に現れる「重閣門」・「重閣中門」については、第一次大極殿院南門を指すと断定できず、直接的に平城宮の第一次大極殿院南門の形態を示す史料はない。したがって、大極殿院南門の形態については、平城宮をはじめとする古代宮都の門の発掘遺構、古代寺院の門遺構、および絵巻物などの資料を網羅的に収集し、検討をおこなう必要がある。

② 騎射・大射の場の検討は、天皇の出御位置と関連して重要であり、中央区朝堂院で検出されている長大な南北掘立柱塀が、騎射の遺構にあたる可能性が指摘されていたため検討をおこなったが、確実なことは言えず、平安時代の騎射の観覧方法などを参照すれば、そうでない可能性が高い。この結論から、大極殿院南門の形態に結びつけるための資料には用いにくくなった。

③ 六国史に現れる門や楼について網羅的に文献資料の収集をおこない、また寺院の門や楼に関しては、資財帳を中心とする史料の検討をおこなったが、楼の階段が常設されている可能性があることがわかる程度で、具体的な形状や機能については、さらに諸資料を収集する必要がある。

④ 平安時代の大極殿儀などを参照すれば、大極殿院の築地回廊に機能上小門が求められるが、その具体的な位置や規模については文献からは明確にできない。発掘遺構および出土遺物からの検討が必要である。

⑤ 第一次大極殿院地区における鬼瓦の出土位置とその状況から、小門の位置が推察できる可能性があるが、Ⅱ期（奈良時代後半）の様相も含めてさらなる検討が必要である。

⑥ 中国隋・唐代の長安・洛陽等の宮殿の検討では、宮殿中軸線上に建つ門は重層をとる例が多く、また門闕形式をとるものがある。大極殿に相当する中枢建物には通常回廊が左右にとりつき、そこに小門を設けている。第一次大極殿は回廊内に独立して建ち様相が若干異なるが、小門の有無については参考にすべき部分がある。また隋の大興城では内庭部の左右に井戸があり、第一次大極殿の南東で発見されている井戸の評価についても再考察する必要がある。

⑦ 朝鮮半島の大極殿院相当施設は、文献ではほとんど判明しないため、発掘資料に頼ることになるが、発掘資料でも宮殿中枢部が明らかになった事例は断片的である。高麗時代の宮殿まで時代を下げれば文献と発掘遺構とで参照すべき点があるかもしれない。そのなかで公山城の臨流閣と考えられている遺構は、第一次大極殿院の東西楼の復元への一資料になる可能性がある。

⑧ 築地回廊のこれまでの復原プロセスを再検討した。築地基底部の幅はⅡ期の築地の堰板抜取と考えられている遺構を、Ⅰ期の規模を踏襲していると考えることができれば、築地基底幅の根拠に十分なりうる。また延喜式にみえる築地基底部と高さの関係も根拠として新たに導入できる可能性がある。築地基底部の構造と規模については、平城宮をはじめとする、明確な築地検出遺構を収集する必要がある。

⑨ 築地回廊の上部構造については、これまで三棟造とする根拠が明確に示されてこなかった。そのため三棟造でない、築地上棟通りに束を立てる案、築地本体を棟木まで立ち上げる案を検討したが、内外の厳重な遮蔽機能をもたせ、また構造的・意匠的にも適当なものという観点から、改めて三棟造が適当という結論に達した。細部の構造は今後の課題である。

２. 類例調査について

これまでの類例調査の概要

	調査日		調査対象	目　的	参加者
1	10 月 9 日 ～11 日	弘前市	岩木山神社楼門・ 長勝寺三門	楼造の類例として、通柱を用いる際の基本構造、桁行５間および梁間３間とする場合の特殊技法、および上層登壇手法。	奈文研：４名 文建協：３名
2	11 月 8 日	京都市	京都御所・ 平安神宮	回廊の類例、および内庭部の様相、宮殿建築の例。	奈文研：５名 文建協：４名
3	11 月 13 日 ～14 日	甲府市	善光寺三門・ 慈眼寺鐘楼門	楼造の類例として、桁行５間の大型楼門・通柱を用いる際の基本構造、上層の使用方法など。	奈文研：５名 文建協：２名

類例調査の成果

① 通柱を多用する岩木山神社楼門と長勝寺山門では、腰組を挺出させるために挿肘木としなければならず、構造的には不安定になるだろうが、詰組とすることによって柱位置以外で構造的安定性をもたせている可能性がある。

② 桁行５間の甲斐善光寺山門は、棟通りの入側２本を通柱とするが、それは上層隅の間の水平材を受けるために上層にも柱を必要とするためである。側まわりの柱は虹梁の内側にのせて、若干の逓減をもたせているが、下層でそれが見えるため、柱脚を組物のかたちに合わせて切り込んでいる。柱盤をもたない楼造の構造として参考になるが、どこまで時代を遡らせることができるか、検討が必要かもしれない。

③ 慈眼寺鐘楼門は通柱構造の門だが、桁行１間と小規模であるために、腰組・上層組物とも簡略である。岩木山神社や長勝寺の門と比較すれば、規模の違いが構造や意匠にもあらわれるのであり、大規模な第一次大極殿院東西楼の復元に小規模な楼門の構造を応用させる場合には、十分な検討が必要である。

④ 京都御所では、紫宸殿周辺の内庭部を中心に調査をおこなった。内庭部の礫敷きは第一次大極殿院の内庭部で発掘されたものよりも小さい。内庭部には犬走りと雨落溝を設けるが、外側には設けていない。紫宸殿をはじめとする各建物は柱が高く、とくに門は縦長のプロポーションになるが、これが古代まで遡りうるかも検討が必要である。

⑤ 平安神宮では龍尾壇上に高欄を設けており、第一次大極殿院でも検討しなければならない課題である。また龍尾壇上に幢竿支柱を設けており、あらためて第一次大極殿院における発見遺構の検討の必要性を感じた。南門基壇の直近に脇門があるため、回廊が南門に向けて反り上がりをほとんど造っていない。脇門の位置が構造と意匠に大きく関連している可能性があり、脇門の位置の重要性を考えさせられた。

⑥　上層への登壇方法としては、建物外側から縁に階段をかけるのが、岩木山神社楼門と長勝寺山門で、建物内の隅の間に折れ曲がりの階段をつけるのが、甲斐善光寺山門である。平安神宮南門も折れ曲がりをいくつももった複雑な階段としている。いずれも急勾配の階段である。さらなる資料の収集が必要である。

３. 今後の検討課題

検討会の予定

第 10 回　2010 年 12 月 22 日　これまでの類例調査の成果と今後の課題

さらにその後は、南門・東西楼・築地回廊の諸建築について、発掘遺構と現存遺構を検討して構造形式を決定し、さらに具体的な構造と意匠の検討をおこなう。また内庭部の様相について、発掘遺構と現存例などを参照して検討する。

類例調査の予定

・12/10～13、中国（故宮・独楽寺観音閣）

目的：大極殿院全体の類例として、太和殿前面の諸施設・内庭部の様相について。また楼造の構造の調査。

・1 月末～２月、韓国（景福宮と慶会楼・昌慶宮などの宮殿建築）

目的：大極殿院全体の類例として、宮殿正殿前面の諸施設・内庭部の様相について。また楼造の構造調査。

・日程未定、京都東山の二重門（南禅寺・知恩院・東福寺など）

目的：南門の類例として、二重門の構造調査。

・日程未定、姫路（円教寺食堂）

目的：東西楼の類例として、楼造の構造調査。

・日程未定、奈良（東大寺中門）

目的：東西楼の類例として、桁行５間の楼造建築の構造調査。